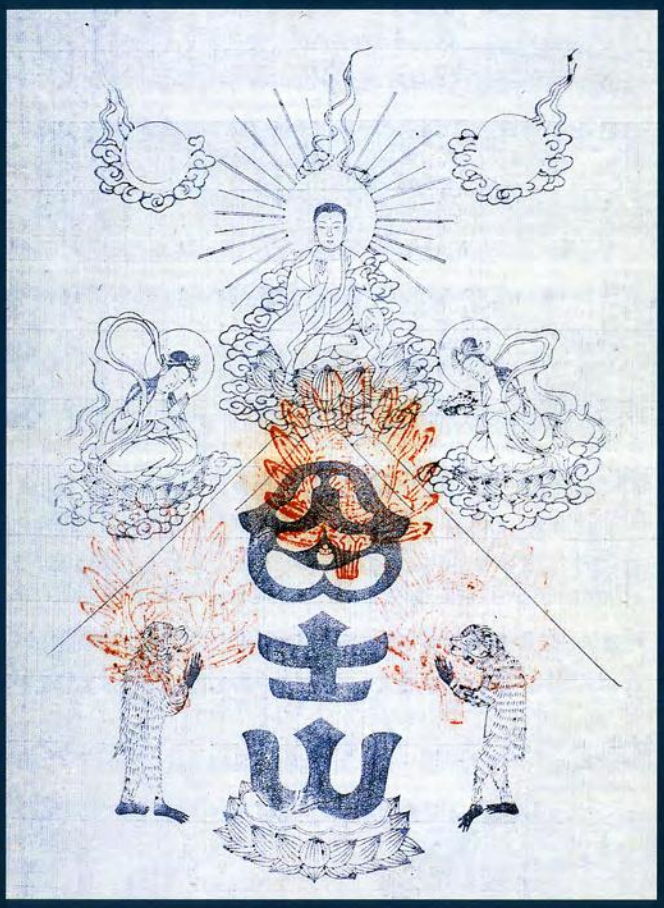
川越市立博物館

博物館だより

第45号



富士山の絵札

富士山は、古代より霊山として人々の信仰を集めてきました。山に対する人々の信仰は山岳信仰と総称されています。その根底には山の神秘性や祖霊の住む霊地としての観念など、素朴な信仰がありました。やがて仰ぎ見る対象であった霊山に分け入って修行し、呪術的な力を獲得しようとする山岳修験者が出現しました。彼らはそれまでの密教や道教の影響を受けて、呪術的な宗教活動を行うようになりました。この活動と信仰は後に修験道と呼ばれました。

富士山においても、中世には修験者が富士山南側の村山（現富士宮市）の地に坊を開き、修行の根拠地としました。ところが江戸時代になると角行藤仏（1541～1646）という修験者が登場し、それまでの修験道とは異なる富士山独自の信仰形態を作り上げました。その教理は「御文句」という独自の経文にあるといわれています。角行の唱えた教理は、食行身禄（1671～1733）と村上光清（1682～1759）に受け継がれ、富士信仰は当時の江戸庶民に広く浸透していきました。各地に富士講が組織され、富士山の登拝が盛んに行われました。

庶民の富士登拝は、各登山口で宿坊を経営している御師たちが仲介しました。これらの御師や麓の浅間神社などでは、富士講の信徒や一般登山者に対して各種のお札を授与しました。これらのお札の中には絵札と呼ばれる神仏像を描いたものが含まれています。写真左の絵札は、上方に雲に乗った阿弥陀三尊が描かれており、その下に富士山をかたどった線と図形化した「富士山」の文字を配し、文字の下には蓮華座が置かれています。また、阿弥陀三尊の上方には日輪と月輪を描き、「富士山」の文字の両側には二匹の猿が向き合っています。このような絵札は、縦40cm、横30cm程の和紙に刷られたものですが、信徒の中にはこれを軸装にして礼拝の対象とする場合もありました。

川越城築城に関する研究ノート

1　はじめに

川越城は扇谷上杉持朝の命を受けた太田道真・道灌父子によって築城され、後北条氏の属城時代を経て近世を迎え、明治維新により廃城となります。この間、社会の動きに連動して川越城はその姿と役割を変えていきました。

川越城の変遷については、近世以来、わずかな資料によって考察されてきました。江戸時代の地誌である『新編武蔵風土記稿』においては、三の門西側の「三角芝地（第1図①参照）」を旧大手門の名残と想定し、築城当初の縄張りは本丸・二の丸・八幡郭程度の規模であったとする考察が記されています。しかし、最近では新資料が発見されないことや明治以降の急速な開発によって城内遺構が失われたため、研究の俎上に載せられることも少なくなりました。本稿では川越城の築城段階の諸資料を比較・検討して、川越城築城の経緯についての私見を記したいと思います。

2　扇谷上杉持朝と川越

上杉持朝が川越に関係する資料の初出は『鎌倉大草紙（注1）』の宝徳元年（1449）の条と思われます。これは、持朝がこの年の冬に「武州河越に隠居」という内容ですが、相模を領国とする持朝が、なぜ川越に隠居したかという疑問が湧いてきます。その理由を考える前に、当時の東国の状況についてみておきましょう。

室町時代における東国の支配は、鎌倉公方を中心とする武士団の結束によって成り立っていましたが、関東管領上杉氏の台頭により、次第に二極化しはじめました。応永23年（1416）、前管領上杉氏憲（のちに「禅秀」と号した）が鎌倉府へ攻め込んだ「上杉禅秀の乱」にはじまり、鎌倉公方足利持氏は管領上杉氏と対立を深めていきました。永享10年（1438）には関東管領上杉憲実が鎌倉府を攻め、翌年には持氏を自害させ（永享の乱）、永享12年には鎌倉公方の復権のために結城氏朝が持氏の遺児を擁して挙兵しましたが、上杉氏は幕府の援軍を得て撃退します（結城合戦）。この段階で鎌倉公方と上杉氏はほぼ対等の力関係になったと考えることができます。

文安4年（1447）、関東管領上杉憲忠の助力により鎌倉府は復興し、足利成氏（持氏の四男）が鎌倉公方に就任しますが、そのような混乱のさなか、宝徳元年になぜか持朝は隠居し、子の顕房に家督を譲ります。

享徳3年（1454）に成氏が憲忠を殺害したため、幕府は上杉方に援軍を送り、成氏を鎌倉から追放し、成氏は翌年6月に下総古河へ落ち、「古河公方」となります（享徳の乱）。この戦乱の中で、顕房が戦死したため、持朝は扇谷家の当主として復権し、長禄元年（1457・注2）川越城

第1図　近世川越城の縄張り

などを築き、管領の山内上杉家とともに古河公方と対峙することになります。つまり、関東は古河公方対上杉氏の二大勢力が覇権を競う戦国時代へと突入したわけです。

これらの戦乱に関する資料からは、持朝が川越に隠居した理由を見出すことはできません。しかし、川越城築城後の寛正3年(1462)、将軍足利義政は追放された鎌倉公方の後継である足利政知(堀越公方・注3)に内書を与え、持朝に河越荘を知行地として与えており、これによって、川越は正式に持朝の領地になりました。つまり、持朝が隠居した時点はもとより川越城築城時点にあっても、川越は持朝の領地ではなかったということです。その一方で、上杉禅秀の乱の際の戦場の一つが武蔵入間川であり、この時以降、扇谷上杉氏が川越周辺に縁を持ち、交通の要衝である当地を重要視したことは推測できます。軍事的な緊張状態のなかで居を定める場合、最前線でなく、ある程度の安全が確保できる場所、言い換えれば領国もしくは安定した勢力範囲が適当と思われ、持朝が隠居した時点で川越がこれらの諸条件に見合う土地であったとすることができます。

3　川越城の築城

上杉氏は享徳の乱によって敵が古河公方となったため、古河を包囲する軍事拠点が必要になったと考えられます。扇谷・山内両上杉氏は公方勢力との争いにおいては同族という関係にありましたが、山内上杉氏は関東管領として領国であった上野を基盤としてその勢力を伸ばし、一方の扇谷上杉氏は相模を領国として南関東に基盤を置き、両氏は次第に勢力を競うようになりました。持朝は享徳の乱で活躍した家臣太田道真・道灌らを重用して、川越・江戸・岩付の3城を築き、川越を持朝、江戸を道真、岩付を道灌の居城としました。この頃には、扇谷上杉氏が管領家を凌ぐ勢力を持っていたと考えられています。その後、道灌の暗殺を契機として両上杉の対立は表面化し、争いが激化していきました。

享徳4年(1455)正月、持朝らは相模国島河原(注4)で成氏軍と戦い、川越・上野に退却したという記事が『鎌倉大草紙』などに見られます。これは扇谷・山内両上杉軍が敗走し、それぞれの本拠地に退却したことを指しています。このことは川越城築城以前にも、退却することができる持朝の拠点が川越にあったということで、言い換えれば、持朝の隠居所が城もしくは城に類する館などの施設であったことを示しています。

川越城の築城に関して、いくつかの文献に記事が書かれていますが、その表現はさまざまです。注目すべきは『永享記(注5)』「太田道灌之事」の条で、この資料では、「河越の南仙波城(注6)」があり、これを「三芳野郷に移し」、「即城を築けり」とあります。つまり、川越の南にあった仙波城を三芳野郷に移して城としたということです。では、この仙波城をもって持朝の隠居所とすることはできないでしょうか。仙波地区は古墳時代以降、大規模な集落がつくられ、とくに平安時代には星野山無量寿寺も創建されるなど、川越地方の中心的な地域になっていたと考えられており、持朝の隠居所の位置としても相応しいと思われます。

また、上記の記録から川越城はそれ以前にあった城館跡を改修したものでなく、いわば新築であったことも推測できます。さて、一般に長禄元年に川越城が築城されたとされていますが、この年が着手した年か完成した年かの議論はなされていません。長禄元年4月に川越城完成とするならば、島河原の敗戦から約2年4箇月しかなく、また、同じ享徳4年6月に当面の敵である公方が古河を本拠に定めてからは約2年程度の期間しかありません。『永享記』には江戸城改修の着手を康正2年とする記録があるため、着手時期が江戸城と同時期とするならば、工期はおよそ1年ということになります。そのうえ、工事に周辺の農民を動員したとするならば、農繁期を考慮するとおよそ半年しかなく、江戸・岩付と同時並行で築城されたという状況は、あまりに短期間すぎるように思われます。築城にあたっては事前調査及び準備期間もあったわけで、これらのことを考え合わせると、一般に言われている古河公方包囲網の一つとして築城されたとするには、時間的にも無理がありそうです。

ここでは、川越城は長禄元年4月に扇谷上杉氏が太田道真・道灌父子に命じ、扇谷の北関東進出の拠点とするために築城されたという可能性を示しておきます。

4　仙波城小考

さて、「仙波城」はどこにあったのでしょう。仙波地区の小字名に「堀ノ内」は2箇所見られますが、現在では喜多院・長徳寺の両境内地にあたります。このうち、長徳寺は「仙波氏館跡」と推測され、かつては土塁・堀の痕跡があったといわれていることから、城館跡の可能性を持つものと判断できます。喜多院については、当時の境内域がどれほどであったか不明ですが、以前、仙波地区在住の方から現在の小仙波町3丁目の一部に「ホリノウチ」と呼ばれていたところがあると聞きました。その地点に関する記録は残っていませんが、その周辺の発掘調査で、城館跡の可能性を持つ堀跡が見つかっています。これは小仙波4丁目遺跡第13次調査で検出された3号溝(第2図)で、調査範囲の関係で全体像は不明ですが、調査区内東端部で北側に屈曲しており、鉤の手状に展開しています。上幅3.5m、底幅0.8m、確認面からの深さ1.2m、断面は逆台形を呈しています。堀の一部は約2mにわたり土橋状に掘り残されており、埼玉県内で見られる15世紀後半の方形館の特徴を示しています。堀に伴う遺構はなく、土塁の痕跡も認められませんでしたが、堀の中から馬骨や僅かながら中国製の青磁碗の破片が検出されており、有力武士の居館の可能性を持つものと考えられます。

市内において上杉氏時代の城館(陣)跡は、国指定史跡河越館跡や県指定史跡大堀山館跡を含む下広谷中世城館跡群があります。これらの城館跡は山内上杉氏が扇谷上杉氏の川越城を攻略した際に、山内顕定の陣とその家臣の居館と考えられ、3千余騎(『松陰私語(注7)』による)が駐留したといわれています。よって、現段階ではこの頃の武将の居館(本陣)とその家臣の居館が別に築かれ、それぞれが規模の大小はあっても同様の施設が整えられていたと推測されています。享徳の乱に上杉方は上州の長尾景春軍と合わせて1千人余の兵が出陣したとされ(『鎌倉大草紙』による)、出陣に際しての拠点は集まってきた兵を駐屯させる施設として相応の規模の城館が必要であったと考えられます。このことから、仙波には持朝の隠居所と家臣の居館が数箇所あり、小仙波4丁目遺跡の例は全体の規模は不明ながら、仙波城もしくはその家臣の居館の可能性があるものとすることができるでしょう。

5　まとめ

本稿では川越城築城の経緯について概観してきました。川越城は長禄元年4月、上杉持朝の命が下り、寛正3年頃までに太田道真・道灌が急ピッチで築城したことが推測され、築城は古河公方に対抗することを主たる目的としたものでなく、南関東に基盤を置く上杉持朝が、川越を北関東進出の拠点化するため、新規に川越城を築城したということで結んでおきます。

この頃の関東の城館の例から判断すると、当初の川越城は台地端部につくられた方形館であったと考えられ、これまでいわれてきた本丸・二の丸程度という近世の縄張りに基づいた当初の縄張りの推測は再考する必要もあるでしょう。昨今の川越城内の発掘調査の増加から中世川越城に関し、興味深い成果も上がっています。とくにこれまで研究のテーマに上がらなかった後北条氏時代の川越城に関することや、そこから推測される上杉氏時代の川越城についても今後の研究によって明らかになるものと思われます。

(注1) 鎌倉公方足利氏を中心として、関東の状況を記した史書。作者不詳。戦国時代頃の成立といわれる。

(注2) 川越城築城の「長禄元年」の改元は9月28日であり、4月は康正3年である。しかし、『鎌倉大草紙』をはじめ、ほとんどの記録は長禄元年となっており、本稿でもそれらに準じている。

(注3) 鎌倉公方が追放された後、幕府は将軍の弟である足利政知を鎌倉公方として送り込んだが、戦乱で荒廃した鎌倉に入れず、伊豆国堀越に御所を置いたため、堀越公方と呼ばれた。

(注4) 現在の神奈川県南部の旧地名。小田原市・平塚市の2説ある。

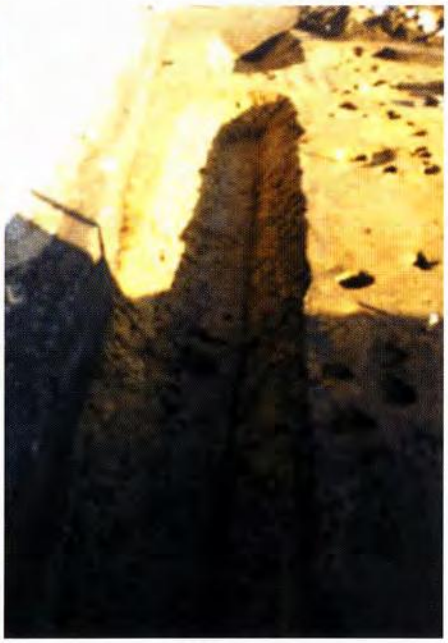
(注5) 室町時代の軍記物語。作者・成立年代不詳。

(注6) 「南仙波城」と読むか、読点を入れて「河越の南、仙波城」と読むか、見解の分かれるところであるが、本稿の論旨と関係が希薄と考え、ここでは言及を避ける。

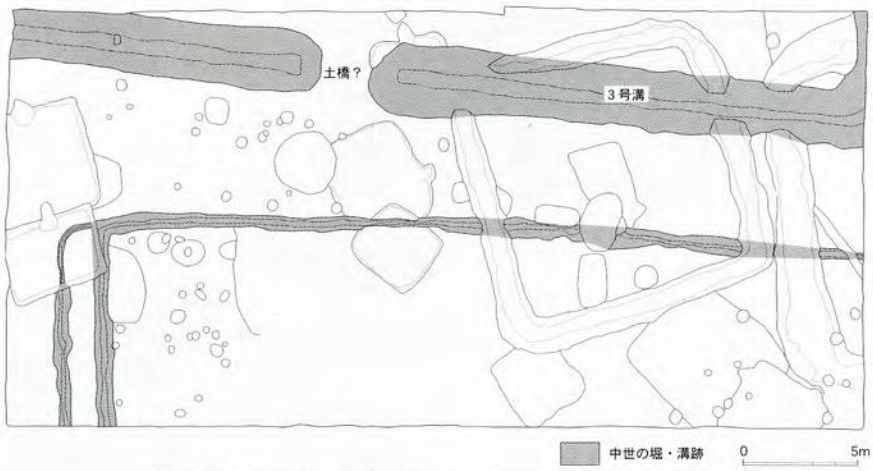
(注7) 室町時代の東国の状況を記した戦記。作者は松陰。永正6年(1509)の成立。

(教育普及係　天ヶ嶋 岳)

3号溝と土橋



3号溝全景



第2図　小仙波4丁目遺跡第13次調査遺構概略図

「ふるさとのまつり」紹介

川越祭りばやし（中台囃子連中）

（埼玉県指定無形民俗文化財）

川越市内に伝わる祭り囃子は、三つの系統に大別されますが、そのうちのひとつ、王蔵流を代表するのが今回御紹介する中台の祭り囃子です。囃子とはそもそも神前で奏する神楽が変化したもので、３系統の囃子はいずれも江戸の神田囃子から発展したものとされています。

中台の祭り囃子は、地元での演奏以外に10月の川越まつり（川越氷川祭礼）でも演じられています。このとき、中台の囃子連中は仲町（旧志義町）の山車に乗り込みます。このように、地元の氏子が囃子を奏でることなく、他所から「連」と呼ばれる演奏者集団を招く形態は古くから存在し、様々な地区で行われてきました。中台と仲町の交流の歴史も長く、かつて中台が志義町の入会地であった頃からのことといいます。

中台の囃子の特色はその曲調にあります。演奏に用いる楽器は笛、大太鼓、小太鼓が２面、鉦（かね）という典型的な五人囃子ですが、速いテンポの囃子と舞は、軽妙で活気に溢れているといった印象を受けます。

さて、中台は福原地区の小字名ですが、本誌第36号で御紹介した今福の祭り囃子もこの地区に伝えられています。こちらは市内に伝わる３系統のうち、芝金杉流を代表するものです。一説には、もともと二つの囃子はひとつのものであったとも言われています。伝承によれば、中台の囃子が、茶人大名として知られる松江藩主、松平不昧（ふまい）公のお抱え囃子方であった王蔵金なる人物の指導によって再編されて以来、王蔵流を名乗るようになったということです。

王蔵流を名乗る囃子は、市内では小室・大塚新田・南大塚など、市外では狭山市や日高市などに伝播しています。また、地元では八雲神社の春祭礼・夏祭礼で演じられます。昭和52年には県の無形民俗文化財に指定され、最近では川越まつり会館での実演や各地の民俗芸能公演など、活躍の場も増えています。

●平成16年度●

利用状況

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも、平成16年度中に、多くの皆様に御来館いただきまして、誠にありがとうございました。

今後も、より多くの方々に御満足いただけるよう、常設展示・企画展示の充実を図っていきたいと考えています。

皆様の御来館をお待ちしています。

施設区分	年間入館者数				1日平均入館者数	開館日数
	一般	大学生高校生	中学生以下	合計		
博物館	67,287	3,450	32,622	103,359	356	290
川越城本丸御殿	74,725	2,987	22,740	100,452	337	298
川越市蔵造り資料館	55,144	3,464	23,001	81,609	271	301

古市場の講

博物館では、平成17年3月26日から5月8日まで第25回企画展「民間信仰のかたち―地域と講―」を開催いたしました。展示の準備のため、「広報川越」で情報を募り、日程の合うものについては講行事の現場を取材させていただきました。皆様のお蔭で講に関する数多くの情報が寄せられ、企画展を開催する運びとなりましたが、様々な事情から企画展で取り上げられなかったものもありました。今回はそうした講の話題を中心に、古市場地区の民間信仰について報告したいと思います。

古市場は、地区の南端を流れる新河岸川で上福岡市と接する、川越市の南東部に位置する地域です。新河岸川の対岸は上福岡市の中心部で、近代的な工場と集合住宅が立ち並びます。しかしひとたび川岸に目をやると、のどかな田園風景が広がり、昔の雰囲気を感じとることができます。展示の準備のため古市場地区を訪れたところ、生活に根付いた信仰の姿を垣間見ることができました。そして、この地域で確認できた民間信仰の中から、企画展では山岳信仰のひとつ武州御嶽講をとりあげました。これは東京都青梅市の御岳山に登拝する講で、講元のお宅には古くから使われている掛軸が保存されています。古市場地区の山岳信仰としては、他に群馬県の榛名山に登る榛名講や神奈川県の大山に登る大山講があったということです。

展示の事前調査のため、古市場に残る講行事を調べているうち、ある旧家にたどり着きました。このお宅の敷地には、小さな祠(はこら)が建っています。御主人である仲茂八郎氏にうかがうと、その由来を次のように語ってくれました。

江戸時代の中頃、村人が一頭の鹿を捕らえたところ、なにやら異臭を発している。不思議に思った村人数人は、名主をしていた仲家の次(治)郎右衛門のところにやってきて、どうすればよいかと尋ねた。次郎右衛門はこの鹿の尋常でない様を見て取ると、このまま何もせず葬るようにと村人に告げた。しばらくして村に不幸なことが相次ぎ、村人たちが何かの祟りではないか、と騒ぎ始めた。気に病んだ次郎右衛門は行者に災いの訳を尋ねてみたところ、いつかの鹿の仕業と知れた。あの鹿は、実は奈良の春日大社の御眷属(ごけんぞく)(お使い)であって、鹿島神宮からの帰り道にここを通った際、難に遭ったのだ、そして村に起きた災いは、村人が神のお使いを殺してしまったことを、神が次郎右衛門を通じて知らせようとして起こしたことだ、と告げられた。それを知った次郎右衛門は、早速宮大工を呼び、屋敷内に小さなお宮を建てて、丁重に鹿をおまつりした。

この出来事以来、仲家では奈良の春日大社をたいそう敬ってきましたが、中でも茂八郎氏の祖母、キチ氏は春日大社まで毎年修行へいくほどの篤信家でした。ついには春日大社から直々に御正体(みしょうたい)をいただいて、大正15年に現在のお宮を建立したそうです。その頃から近隣の地域からも信仰を集めるようになり、一時は春日講という講も組織され、縁日である4月10日と12月10日には神楽が奏されていたそうです。春日講はその後解散してしまいましたが、仲家では現在も縁日には幕を張って、様々な食べ物をお供えしています。

仲家にはもうひとつ別の信仰があります。現在でも代参が続けられている雷電講は、雷除けに御利益があるという群馬県板倉町の雷電神社を崇敬するものです。仲家の雷電信仰は、茂八郎氏の父、長次氏(明治34年生)の時代に始まったものです。長次氏は小さい頃から大の雷嫌いで、見兼ねた長次氏の父が雷除けに霊験あらたかとして、上州の雷電神社に息子を連れていき祈願したことが始まりだそうです。その後、近隣に雷の被害があったことなどから、雷嫌いの人が集まって講を組織し、代参を行うようになりました。仲家は代々講元をつとめ、現在でも地区の10軒が雷電講に加入しています。

雷電講は毎年5月頃に代参を行います。講員全体を代表して二人ほどが車で板倉町に行き、雷電神社に参拝します。この講は毎年違う人が代参する順番制です。板倉地方は鯰(なまず)が名物で、参拝がすむと以前は社務所で直会(なおらい)として天然の鯰料理を食していました。直会とは神に供えたものと同じものをいただくこと、つまり神と共食することであり、信仰の一部をなす行事ですが、現在ではまわりの料理屋さんで行っているとのことです。参拝を果たした講員は古市場に帰ると、いただいたお札を配って講員全体に功徳を施します。

展示の準備が始まった当初、講の実態がつかめず、現在でも活動が続けられているだろうか、信仰用具が保存されているのだろうかと思うことがたびたびありました。しかし古市場のように、地区によっては現在でも様々な信仰行事が続けられていることがわかりました。人々の信仰は、代参に自動車を利用するなど、現代の生活に合うよう形態を変えて生き残ってきたのです。調査先で出会った人々の熱心な信仰心に、私はあらためて驚きました。唯一残念だったのは、調査期間が短く、全地区について詳しく調べることができなかった点です。これからの課題としたいと思います。　　(取材　石川みな)

雷電神社社殿（写真提供：群馬県板倉町　雷電神社）

Information

平成17年度の博物館主催行事です。(12月まで)

講　座・教　室　etc.

行　　事	日　程 申し込み日
●昔の遊び 紙玉鉄砲やけんだまなど、 なつかしい昔の遊び	7/30、31 当日直接
●夏休み子ども体験 ミニ縄文土器の作製や和楽器、昔の織物などの体験	8/3、4、5 当日先着
●ミュージアムシアター 子ども向けの映画 ―おこりじぞう他―	8/20、21 当日直接
●野外博物館教室 「川越の祭りを巡る」 ―古谷のほろ祭―	9/18 9/2
●土器作り講座 縄文土器の作製	10/2 9/5

行　　事	日　程 申し込み日
●博物館歴史講座 「川越の中世」	10/23、30、11/6 10/1
●子ども博物館教室 「川越凧作り」	10/29 10/2
●民俗芸能実演 「石原のささら獅子舞」	11/3 当日直接
●博物館歴史講座 「川越の古代」	11/13、20、27 11/2
●市民の日記念 「ミュージアムコンサート」	12/4 11/4

※変更の可能性もあります。申し込み方法も含め、詳細については、「広報川越」を御覧ください。
お問い合わせは博物館まで。

土　曜
体験教室

8月を除く各月2回、
土曜日に開催しています。
博物館に遊びに来てください。

実施日	内　　容	申し込み日
7/23	竹とんぼを作ろう	当日先着
9/10	十五夜の話とお月見だんご作り	9/1
9/24	和紙作りに挑戦	9/4
10/8	埼玉大学の企画	当日先着
10/22	埼玉大学の企画	当日先着
11/12	わら細工に挑戦	11/1
11/26	切紙・折紙を楽しもう	当日先着
12/10	とびだす川越の建物	12/1
12/24	お正月飾りを作ろう	12/2

- 場所　川越市立博物館
- 時間　午前10時～11時30分と
  午後１時30分～３時30分

※詳細は当館にお問い合わせください。

切紙・折紙

和紙作り

第15回収蔵品展

「暮らしの中のお茶文化」　平成17年7月23日(土)～9月19日(月)

特別展示室の展観

博物館では、川越市やその周辺地域の方から寄贈された資料を数多く収蔵しています。これらの資料を有効活用するため、毎年収蔵品展を開催して広く公開する機会を設けています。

今回は、寄贈された資料のうち、お茶に関する資料を展示します。展示資料は、製茶の道具・機械類および煎茶碗などの喫茶の道具を予定しています。あわせて、川越地方における茶の湯文化の歴史なども紹介する予定です。皆様の御来館をお待ちしております。

第26回企画展「中世陶磁への招待－地中からのメッセージ－」

会期：平成17年10月8日(土)～11月14日(月)

中世遺跡の発掘調査では、さまざまな陶磁器が出土します。国内の渥美・常滑・瀬戸など六古窯の製品、中国からはるばる運ばれてきた青磁・白磁、そして在地の土器。これらは中世の人々がくらしの中で用いた器です。

この展覧会では、川越を中心に埼玉県内から出土した中世陶磁を一堂に会して展観します。そして、陶磁器を通じて当時の人々の美意識とそのくらしぶりの一端を探ってみたいと思います。

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券		
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円

※(　)内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆開館時間　午前9時から午後5時まで（ただし入館は4時30分まで）

◆休館日　月曜日（休日の場合は翌日の火曜日）※川越まつりの翌日は開館
第4金曜日（休日・休翌日を除く）年末年始（12月28日～1月4日）
特別整理期間（12月中旬予定）

＊開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも同様
（特別整理期間は、博物館のみ休館）

交通案内

東武東上線・JR川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より
東武バス「札の辻」下車徒歩8分
・御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

発行日　平成17年7月11日　　発　行　川越市立博物館
〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1　☎049-222-5399　FAX 049-222-5396
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
http://www6.ocn.ne.jp/~kawahaku/

R100
古紙配給率100%再生紙を使用しています